

A・MUSEUM

vol.86
[2016.3.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



馬を走らせながらオルガを拾う競技

モンゴルの冬の馬術競技

モンゴルの遊牧民の馬具に、^{くら}鞍、^{むち}鞭、オルガ（馬取り^{ざお}竿）があります。オルガは竿の先に革の紐の輪がついたもので、家畜の馬を捕らえる道具です。竿の長さは5~7mとかなり長いものです。

このオルガを扱う馬術競技は、まず地面においてあるオルガを馬を走らせながら拾う競技、そのオルガで馬を捕らえる競技、そして捕らえた馬を鞍なしで乗りこなす競技と続きます。

遊牧民の男子たちは、小さい頃から羊などでオルガの使い方を練習し、これがうまく使えるようになると一人前と認められます。家畜の馬はオルガをみただけでおとなしくなり、オルガをもたないで放牧に出ると馬たちをコントロールするのが難しいといわれます。オルガは、モンゴルの遊牧民にとっても、馬にとっても特別な馬具であるといえそうです。
(企画課 小幡和男)



オルガで馬を捕らえる競技

特別展示

あの衝撃の日から5年 -東日本大震災はなぜ起きたのか-
会期：2016年3月1日(火)～4月10日(日)

あの衝撃の日-2011年3月11日に突然起こった東北地方太平洋沖地震の激しく長い揺れと、この地震によって引き起こされた東日本大震災の発生から約5年がたちました。この地震はその規模を示すマグニチュード(Mw)が9.0で、阪神・淡路大震災を引き起こした兵庫県南部地震の約1,400倍ものエネルギーをもつ超巨大地震でした。そして、東北地方沿岸を中心に最大20mを超える巨大津波が押し寄せて、未曾有の大災害となったことはまだ記憶に新しいことと思います。茨城県でも激しい地震動や津波によって、死者・行方不明者25名と県史上最大の地震災害となりました。

東北地方太平洋沖地震は、日本列島のあるプレートとその地下に東側から沈み込む太平洋プレートとの境界部に、局所的にたまっていた歪みが開放されて起こった地震で、いくつもの歪みが連動して開放されたことによってエネルギーが巨大化したと考えられています。この連動によって岩手県沖から茨城県北部沖に

至る長さ約400km、幅約200kmもの広大な領域の海底が大きく動き、巨大津波を引き起こしたのです。このとき、牡鹿半島(宮城県)が東南東に532cm移動するなど、東日本の大地が東へと大きく動きました。

東日本大震災以来、日本列島は地震や火山などの活動期に入ったともいわれています。現在もなお、大きな余震や連動して生じたと思われる地震がたびたび起こっており、余震の発生回数は震災前の3倍程度の高水準で推移しています。さらに、御嶽山噴火の大災害をはじめ、各地で火山活動が活発化しています。

近年は集中豪雨や竜巻などによる気象災害も多発しており、昨年9月10日には記録的な集中豪雨によって常総市で鬼怒川の堤防が破堤し、広範囲にわたり甚大な浸水被害を受けました。今回の特別展示では、東日本大震災の後5年間で明らかになってきたことを中心に展示し、さらに鬼怒川の洪水災害についても紹介します。(教育課 小池 渉)



津波の巨大な力で流されながら裏返しになった石碑(岩手県陸前高田市)



東日本大震災の爪痕(茨城県日立市・会瀬漁港)

ツクバハコネサンショウウオが国内希少野生動物種に指定されました 環境トピックス

2015年12月1日、本県の筑波山塊に生息するツクバハコネサンショウウオが「国内希少野生動物種」に指定されました。

このサンショウウオは、2013年に京都大学の吉川夏彦氏らによって新種として発表されました。本種は、この地域の山頂付近の森林に生息し、渓流源流部の岩場で産卵します。幼生は、約3年間、少し下がった溪流で育ちます。そのため、開発などにより溪流が分断されると、生息できなくなってしまう。

環境省では、「絶滅のおそれのある野生動物種の保存に関する法律」にもとづいて、絶滅のおそれのある野生動物種を国内希少野生動物種に指定し、個体の捕獲、譲り渡し等を原則禁止するとともに、必要に応じ生息地等保護区の指定や保護増殖事業を実施することにより、種の保存を図っています。

今回、ツクバハコネサンショウウオが選ばれたことにより、生息地域である溪流付近の環境を保全し、一部の心ない愛好家などによる乱獲から守る取り組みなどが進むと期待されます。(教育課 潮田好弘)



ツクバハコネサンショウウオの成体

これまで、中期計画2015について、Vol.83「教育普及事業の新たな展開」、Vol.84「コレクション機能」、Vol.85「広報活動の新たな展開」と、各課のおもな取り組みについて取り上げてきました。最終回は、管理課の「安全で快適な施設の提供」についてです。

当館では、入館した誰もが安全・快適に過ごせるように、館内外の施設設備について、職員による巡視のほか、外部有識者等からの助言をもとに、危険箇所等を把握し、日頃の維持修繕に努めているところです。しかしながら開館から20年以上が経過し、野外木造施設の腐食進行、常設展示の陳腐化、トイレなど設備の老朽化等について来館者から意見をいただくことも多くなってきました。この状況に適切に対応するためには、多額の予算を伴う大規模な改修が必要であることから、年次計画により改修を進めています。ここでは現在進行中の2つの事業について紹介します。

【木道等整備事業】

当館は15.8haの広大な野外施設をもち、変化に富んだ自然地形と自然林の中で、参加体験型の自然観察や学習ができます。敷地は北側と南側に台地が広がり、台地にはさまれた低地には「とんぼの池」、傾斜地には「水の広場」があります。これらの場所を結ぶ経路には木道が整備されており、来館者の湿性植物や水中生物の観察にも利用されているところです。木道は、傷んだ床板を随時交換してきましたが、腐食進行に対応できず、安全確保も不安な状況になってきたことから、このたび全面的に木道を整備することとなりました。整備延長は約400メートルに及ぶ大規模な工事で、完成は今年夏頃を予定しております。来館者の皆様には工事期間中不便をおかけしますが、完成時には新しいテーブルベンチも配置され、安全で快適な環境が整備されますので、ご協力いただきますようお願いいたします。

【水の生きものコーナー修繕工事】

当館の常設展示は開館以来、大規模な修繕が行われず、近年トラブルが頻発するようになってきました。

なかでも、第3展示室の水の生きものコーナーは、本県の久慈川水系をモデルとして、上流から海まで一連の水槽で、生きた魚を観察できる人気の展示ですが、水温や水質を安定させる機器の故障が頻発しており、安定した飼育環境の確保が課題となっています。飼育生物の健康管理のために優先すべきは水温管理であることから、今年度は冷却装置であるチラーユニットを更新しております。来年度以降は、水質管理のため、ろ過タンクやポンプの更新を予定しています。設備更新後も、表向きの展示はこれまでどおりの姿ですが、博物館の裏側にも必要な予算を確保することにより、良質なサービスの提供に努めてまいります。

館内では、このほかにも、常設展示で人気の高い恐竜の動く(動く模型)や、トイレの洋式化等は、来館者サービスに直結することから、優先的な改修が必要となっています。今後は、施設の長寿化への対応も踏まえつつ、これらの改修を計画的に行うことにより、来館者にとって安全で快適な施設づくりに取り組んでまいりたいと考えております。(管理課 田崎俊一)



老朽化した「とんぼの池」周辺の木道

さくら

咲き誇る満開の花の下、心と振り向くとたよりげなく遠く歩んできた身の跡が靡気に浮かんでまいります。“明日ありと思う心の仇桜夜半に嵐の吹かぬものか” 親鸞聖人が9歳で得度する前夜に詠まれたという有名な歌ですが、明日では夜のうちに桜が散ってしまうかもしれないから今がその時だと、心の決意を桜の花でお例えになられました。自分も聖人にあやかりその時が来たことを悟りました。10年余の博物館人

館長コラム by director SUGAYA

生は長くもあり、短くもありで、楽しく過ごすことができました。この間、職員はもちろん、友の会、ボランティアの皆様をはじめ多くの関係者の方々にご大変お世話になりました。心から感謝を申し上げます。

茨城県自然博物館は20周年を迎えたばかりのまだ若い伸び盛りの博物館です。幹はしっかりと茨城の大地に根付き、四方に伸びる枝にはこれからも毎年満開の花を咲かせてゆくことでしよう。



イラスト：霧見ひかり(ミュージアムコンパニオン)

30年ぶりの珍魚発見

研究報告 1

昨年の4月、大変珍しい深海魚「ドクウロコイボダイ」が那珂湊沖で捕獲されました。茨城県では、1983年の初記録以来、じつに32年ぶりになります。

ドクウロコイボダイが属するドクウロコイボダイ科は、世界で3種のみが知られている小さなグループです。その内、日本近海からは、ドクウロコイボダイとツマリドクウロコイボダイの2種が報告されています。名前に「イボダイ」とありますが、ドクウロコイボダイは、黒や褐色の体色に円筒形のスマートな体型をしており、銀灰色で扁平な体型のイボダイとはまったく似ていません。しかし、ドクウロコイボダイの咽頭部には食道嚢とよばれる袋状の器官があり、この食道嚢がイボダイ亜目の共有派生形質であることから、イボダイのなかまに分類されています。

ドクウロコイボダイは、世界中の温帯海域から熱帯海域にかけて非常に広い範囲に分布していますが、その分布の広さに反して、捕獲される機会は極めてまれなため、その生態はほとんどわかっていません。日本近海でも、各地で数年～数十年に一度という頻度でしか捕獲されないため、珍魚中の珍魚とされています。

このドクウロコイボダイは、那珂湊沖で操業していたメヒカリ漁の底引き網船によって捕獲されました。

その名のとおり、体表はザラザラとした手触りの硬いウロコにおおわれています。DNA解析用に筋肉を採取すると真っ白で油分を豊富に含んでいました。和名の「ドク」については、200年以上昔に地中海で起きた食中毒事故が由来のようですが、名づけ親である阿部宗明博士は、検査の結果では毒性はなかったと論文で言及しています。しかし、海外の文献では肉に毒性があるとしているものもあり、毒性の有無については、研究者の間でも意見が分かれています。ドクウロコイボダイの頭を正面から見ると、上あごの先端が少しくぼんで「人」の字のようになっています。まるでイヌやキツネの顔のようにもみえるため、大きな目と相まってとても愛嬌がありますが、口を開けてみると、鋭い歯がカーブを描きながら1列に並ぶステーキナイフのような歯列をもっています。この歯を使って海中に浮かぶサルパなど漂泳性の被囊動物を嚙り取って食べていると考えられています。詳しくは、当館の研究報告第18号に報告しておりますので、ぜひご覧いただければと思います。

珍魚「ドクウロコイボダイ」は、当館に液浸標本として収蔵されています。いつか皆さんにお披露目できる日を楽しみにしております。（資料課 土屋 勝）



ドクウロコイボダイ

(撮影：舟橋正隆)



鋭い歯が並んだ口

(撮影：舟橋正隆)

モズ

皆さんは木の枝や有刺鉄線に突き刺さっている「はやにえ」をみたことがありますか。これは、日本のほぼ全国でみられる野鳥「モズ」の仕事です。

モズには満腹・空腹に関係なく、カエルやバッタ、ミミズ、ネズミなどの獲物を見つけると本能的に捕らえ、小枝などに突き刺しておく独特な習性があります。これを「はやにえ」といいます。はやにえには、保存食ではないかという説やなわばり

の目印にしているという説など諸説がありますが、理由はいまだ明らかになっていません。また、モズは漢字で表すと百の舌をもつ鳥「百舌鳥」と書くように、ほかの鳥の鳴き真似がとても上手な鳥です。

愛らしいすがたに独特な習性を併せもつモズは当館の第3展示室でご覧いただけます。また、博物館にお越しの際は、当館の野外で野鳥観察を楽しんでみてはいかがでしょうか。（ミュージアムコンパニオン 木村花歩）

小さな発見—ミュージアムコンパニオン—



モズ(雄)

厳冬期のモンゴルの自然調査

研究報告 2

2016年7月、第66回企画展「ユーラシアステップの大自然」(仮称)を開催します。ステップとはユーラシア大陸の温帯地域に東西数千キロメートルにわたって分布する草原をいいます。この地域は降水量が少ないため、イネ科植物を中心とする樹木を欠いた草原が広がっています。私は、2001年から2010年にかけて、モンゴルを中心に東は中国内蒙古自治区、西はウライナまでステップの植物を調査してきました。その成果を中心にステップの自然とそこに暮らす人々の生活を企画展で紹介しようと準備を進めています。しかし、今までの調査は夏に行われ、厳冬期の草原の自然や遊牧民の生活をみたことがありませんでした。広大なステップで現在も遊牧が行われているモンゴルでは、最も過酷な冬の暮らしが1年のサイクルの中心で、春夏秋冬は冬のためにあるともいわれます。そこで、2016年1月、厳冬期のモンゴルを調査することとなりました。

調査員は、資料課の宮本、教育課の後藤、そして私の3名です。調査の期間は、11日から18日までの8日間、現地調査は13日から16日までの4日間としました。調査地は、ウランバートル近郊の小さな町、エルデネとエルデネサントの周辺です。調査の目的は、遊牧民のゲル(移動式住居)を訪ね、草原の自然、家畜のよ

うず、遊牧民の生活を記録することです。調査では2軒のゲルを2日ずつ訪ねる予定でしたが、案内してくれた協力者の計らいで、4日間で8軒のゲルを訪ねることができました。それぞれのゲルでは大歓迎を受け、遊牧民の生活や客をもてなす文化に直接触れることができました。厳しい冬のために準備した干し肉や冷凍肉、馬乳酒やモンゴルアルヒとよばれるアルコール類、おもに牛糞を利用する燃料など、想像より遊牧民の生活は大変豊かなものでした。

この時期のモンゴルの気温は、氷点下30度がふつうで40度になることもある中、遊牧民の冬の野営地は地形を選ぶため、周辺より10度も暖かいといわれます。私たちは半信半疑でしたが、今回の調査でまさにこの現象を体験することができました。また、馬、牛、羊、山羊などの家畜は、冬でも日中は元気に雪の積もった真っ白の草原で枯草を食っており、その力強い生命力をみるることができました。表紙の冬の馬術競技もこの調査で取材できた成果のひとつです。

数種の野生動物にも出会うことができました。特に絶滅が心配されるヒツジのなかま「アルグリ」をみることもできたのは幸運でした。これらの成果は企画展で詳しく報告したいと思います。(企画課 小幡和男)



冬の野営地で羊たちに塩を与える



遊牧民のゲルでもてなし

ウグイの婚姻色

春は出会いと別れ、そして新たな恋の予感を感じる季節です。今回はそんな春にぴったりのコイのなかまの話です。

第3展示室の中流水槽ではウグイを展示しています。普段は地味な銀色の体をしていますが、繁殖期になると、雄と雌ともに体に黒い3本のラインが現れ、腹側は鮮やかな朱色になります。これを婚姻色といい、体色が変わるのは異性へのアピールのためだと考えられています。

ウグイの繁殖期は3月から6月ごろなので、現在、水槽内でも婚姻色が現れはじめています。ウグイにとっても恋の季節なのです。この魚をアカハラとよぶ地域があるほど、この季節は腹が赤く染まり、水槽内を華やかに色どります。

まだウグイの繁殖期ははじまったばかりです。水槽内で婚姻色がでないウグイもこれから徐々に体色が鮮やかになっていきます。水槽の前ではぜひ足を止め、ウグイの美し

おさかな通信

さをご覧ください。

(水系担当 藪内雅英)



婚姻色が現れたウグイ

新展示「Zoo Mu See」がやってきた！

収蔵品紹介

2015年12月15日、第4展示室の「昆虫のからだのつくり」コーナーに『Zoo Mu See』というコンテンツを導入しました。Zoo Mu Seeは、スキャナで取り込んだ高解像度の昆虫の画像を拡大してみることが出来る装置です。Zoo Mu Seeを開発したのは、画像や映像をテーマにした作品の制作や、学校や科学館などでワークショップの開催などを行っている橋本典久氏です。昆虫画像の多くは、標本ではなく生きている状態でスキャンされたもので、本来の質感や色を保っています。実物の大きさから徐々に拡大していくことができ、チョウの翅の模様をつくる鱗粉のひとつひとつ、カブトムシのからだに生えている微細な毛など、200以上の画像を拡大してみることが出来ます。

画像の拡大やみるポイントを動かす操作は、タッチ

パッドで行います。虫体にカーソルをあわせてタッチパッドをタップ(軽くたたく)すると昆虫が拡大し、2回タップすると昆虫をつまんだようにして動かすことができます。また、画面中央下のコントロールバーでも拡大・縮小、画面の移動ができます。小さい子どもには操作が難しいかもしれませんが、大人と一緒に座れるイスもあるので、ご家族で体験してみてください。

現在、Zoo Mu Seeが博物館などの常設展として展示されているのは、新潟県の十日町市立里山科学館越後松之山「森の学校」キョロ口と当館の2館のみです。ぜひ、当館の第4展示室に足を運んでいただき、Zoo Mu Seeと隣接する実物の標本展示とあわせて、昆虫のからだのつくりの微細な構造の美しさや精巧さを感じてもらえれば幸いです。(資料課 中川裕喜)



第4展示室に設置された「Zoo Mu See」



「Zoo Mu See」を体験しているようす

ジルコンから分かった「日本最古の地層」

なるほど博物館

このコーナーは、自然に関するさまざまな情報を、わかりやすくお伝えするコーナーです。

日本列島の歴史は約46億年にわたる地球史のなかでは新しく、大陸から離れてはほぼ現在の位置に移動して日本列島の概形ができたのは約2500万～1500万年前と考えられています。しかし、それよりはるか以前に大陸やその縁辺部などでできた岩石が日本列島の各地にみられ、その起源を探る研究が進められています。ここでは、茨城県にある「日本最古の地層」と、その年代を知るために使われるジルコンという鉱物粒子などについて紹介します。

茨城県北東部の日立市から常陸太田市にかけて連なる山地には、日立古生層とよばれる地層が広く分布しています。その一部の地層ができたのが約5億1500万～5億年前の古生代カンブリア紀であり、日本最古の地層とされています。この年代を調べるために用いられたのが岩石に含まれていたジルコンです。岩石を砕いて0.1～0.2mm程度のジルコン粒子を探し出し、この鉱物ができた放射年代を測定することでその年代が明らかになりました。

なお、日本最古の化石は岐阜県高山市の凝灰岩の地

層からみつかったコノドント(無顎類の歯の化石)です。その形態や岩石の年代測定によって約4億7200万年前(オルドビス紀中期)の化石と考えられています。現在、日立古生層のカンブリア紀の地層から化石を探す取り組みが進められており、もしみつければ、アノマロカリスに代表されるバージェス動物群とほぼ同時期になり、日本最古の化石となるため、今後の研究の動向に注目です。(教育課 小池 渉)



日本最古の地層(左)と含まれていたジルコン(右下)(提供:田切美智雄)

トピックス

○「シニア向け自然大学」の実施

「シニア向け自然大学」は、茨城県を中心に自然について知識を深めたいシニア向けの講座で、平成26年度の下半期よりスタートしました。動物、植物、地学と連続3回の講座で、3回の講座に参加した受講者には修了証が授与されます。平日の金曜日に実施され、これまでに計9回の講座が実施されました。

今年度行われた講座のうち、地学分野の「恐竜時代の海の生きもの」では、担当の加藤太一学芸員が、恐竜が生きていた時代やその時代の海の生きもの、茨城県にある恐竜時代の地層についてわかりやすく解説し大変好評でした。ほかの分野でも「茨城の絶滅危惧植物」や「第四紀の海の生きものー茨城の貝化石からわかることー」など、茨城の自然を楽しく学ぶことができる講座を実施しました。

今後も、それぞれの分野で興味深いテーマの講座を準備していきたいと思えます。「シニア向け講座」と銘打っておりますが、受講に際しては特に年齢制限はなく、どなたでも参加することができます。ぜひご参加ください。（教育課 小泉直孝）



自然講座「恐竜時代の海の生きもの」のようす

○くらしの中の動物展入館者10万人達成！！

2016年1月9日(土)、第64回企画展「くらしの中の動物ー嫌われものの本当のすがたー」の入館者が10万人に達しました。昨年の10月10日にオープン以来、ちょうど3か月での達成です。

記念すべき10万人目のお客様となったのは、千葉県酒々井町から家族5人で来館した戸井旺汰さん(9歳)です。記念式典では、菅谷博館長から10万人目の入館証明書が授与され、今回の企画展にちなんだヘビのぬいぐるみや企画展オリジナルクリアファイルなどのミュージアムグッズがプレゼントされました。旺汰さんは当館を訪れるのははじめてで、「マンモスをみにきました。10万人目になってとても嬉しいです」との感想をいただきました。記念式典後、3人兄弟の長男ということで家族の先頭に立って熱心に企画展をみている姿が印象的でした。

当館は、これからも常設展のみでは伝えきれないタイムリーなテーマや身近な環境を考えるテーマの企画展を開催していきます。博物館へのご来館をお待ちしております。（企画課 中里 賢）



記念式典のようす

○友の会に入って博物館を活用しよう

当館の友の会は、2016年3月で創設22年目を迎えます。友の会に入会すると、さまざまなイベントに参加できるなど、博物館をじょうずに活用することができます。今年度は、友の会の活動をより充実したものにするために、当館が企画する人気イベントに「友の会枠」を設け、優先的に参加できるようにしました。

7月に行われた自然観察会「挑戦！オールナイト昆虫観察！2015」では、「友の会枠」により、一般の参加定員30名とは別に11組31名の会員が参加しました。定員30名に200名を超える応募があったことを考えると特典としては大変有効だったのではないのでしょうか。

また、毎週日曜日に行われる体験型のイベントであるサンデーサイエンスを、12月から2月までの3か月間、第2日曜日の午前中に「友の会枠」をつくり、友の会会員限定で実施しました。12月の「アンモナイトを調べよう」では、38名の友の会会員が参加することができ、大好評でした。

来年度も、「友の会枠」の設置を継続するとともに、会員の充実した活動ができるようにさまざまな試みを行っていきます。（教育課 潮田好弘）



「友の会枠」で実施したサンデーサイエンス「アンモナイトを調べよう」

巡回展「土ってなんだろう？」



展示会の入り口



土壌モノリスを中心とした展示会場

2015年12月19日から2016年1月24日まで、「2015年国際土壌年記念巡回展 土ってなんだろう？」が、当館の企画展示室で開催されました。この展示は、埼玉県立川の博物館が主催し、全国8か所の博物館やイベント会場を巡回したもので、当館が最後の開催地でした。普段、気にとめることがあまりない「土」について、土壌モノリスという土の標本や土壌動物の拡大模型などを展示し、さまざまな観点から、土が私たちの生活に深い関わりをもっていることを紹介しました。

皆さんは、土がどのようにできるかご存じですか。土は、岩石などが風化によって細かく砕かれたものに、土壌動物や菌類によって細かく分解された落ち葉や動物の死体があわさって、長い年月をかけてできあがります。「土ができるまで」というコーナーでは、この過程を豊富な土壌の標本を使ってわかりやすく紹介していました。

また、「ふかふかの土とかたい土」では、畑で耕した土と、耕さなかった土の重さを比べる体験コーナー

がありました。意外かもしれませんが、耕していない土の方が、土のなかの生きものはたらきが活発でふかふかしており、耕した土よりも軽いのです。体験した人のなかには、「普段私たちが当たり前だと考えている土に対する知識と違った結果に驚いた」と語っている方もいました。

今回の展示を通して、身近にある土にも多様性があるということ、また、私たちの生活を支える「縁の下の力持ち」であると同時に、守っていかなくてはならないものであるということもお伝えできたのではないのでしょうか。
(教育課 潮田好弘)

編集後記

新社会人1年目の今年度を振り返り、強く心に感じたことがあります。月並みではありますが、人とのつながりを大切にすることです。今の自分がこうしてあるのは、たくさんの人に支えられているからだと思います。

春、出会いと別れの季節ですね。今までの出会いはもちろんのこと、これからの出会いも大切に、おごらず、誠実にたくさんのお会いに向き合っていきたいです。(Y.T)

【交通案内】



＜車ご利用の場合＞

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
 - 鉄道・バスご利用の場合
 - 東武アーバンパークライン(野田線)愛宕駅下車
～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
 - つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅
下車～関東鉄道バス「岩井/バスターミナル行き」
乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- ※事前に発車時刻等をご確認ください。



【開館時間】

9:30から17:00まで
(入館は16:30まで)
※ペット、遊具、テ
ブル、椅子及びテン
ト等のお持ち込みは
ご遠慮ください。

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
一般	740円 (600円)	530円 (430円)	210円 (100円)	1,540円
高校・大学生	450円 (310円)	330円 (210円)	100円 (50円)	1,030円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	310円

(注)：()内は団体料金(20名以上)
未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。
次の日は入館料が無料です。

- 5月4日(みどりの日)
- 6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日)
- 3月20日(春分の日)
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間を除きます。)

【休館日】

- 毎週月曜日
- ※3月21日(月)は開館し、翌日が休館となります。
- ※5月2日(月)～5月5日(木)は開館します。
- ※6月20日(月)～6月25日(土)は館内整理のため休館となります。



自然博物館ニュース A・MUSEUM (ア・ミュージアム)

A・MUSEUM (AMUSEMENT + MUSEUM)

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム (アミューズメント+ミュージアム) をめざしています。

企画・編集:ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2016年3月15日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL.0297-38-2000 FAX.0297-38-1999
URL <http://www.nat.museum.ibk.ed.jp/>
E-mail webmaster@nat.museum.ibk.ed.jp

2015年9月から当館のHPアドレスが新しくなりました。